

科研基盤研究(B)
「高レベル放射性廃棄物(HLW)処理・処分施設の社会的受容性に関する研究」
第2回バックエンド問題研究会
議事録

日時：2016年6月24日（金）18:00～20:00

会場：早稲田大学早稲田キャンパス 19号館 713会議室

記録：片寄 凌太

出席者(敬称略)：

研究会メンバー

松岡 俊二（研究代表）	早稲田大学国際学術院（アジア太平洋研究科）・教授
勝田 正文	早稲田大学理工学術院（環境・エネルギー研究科）・教授
松本 礼史	日本大学生物資源科学部・教授

研究協力者

竹内 真司	日本大学文理学部地球科学科・准教授
-------	-------------------

オブザーバー

岩田 優子	早稲田大学国際学術院（アジア太平洋研究科）博士後期課程
-------	-----------------------------

事務局

李 洸昊	早稲田大学国際学術院（アジア太平洋研究科）博士後期課程
中川 唯	東京工業大学大学院（社会理工学研究科）博士後期課程
吉田 朗	早稲田大学大学院（社会科学研究科）博士後期課程
朝木 大輔	早稲田大学理工学術院（先進理工学研究科）修士課程
片寄 凌太	早稲田大学理工学術院（環境・エネルギー研究科）修士課程

報告1: 松岡俊二「青森県六ヶ所村調査報告(概要)」

- ・研究目的
- ・研究項目
- ・研究計画と方法
- ・青森県六ヶ所村調査の概要
- ・青森県六ヶ所村の概要
- ・核燃料サイクル関連施設の立地受入と社会的受容性
- ・六ヶ所村企画調整課インタビュー
- ・日本原燃（株）視察および質疑応答
- ・「花とハーブの里」代表 菊川慶子インタビュー

報告2: 吉田 朗「六ヶ所村役場の取り組みと認識」

- ・調査日時

- ・調査先（六ヶ所村）概要
- ・調査目的
- ・事前調査項目
- ・調査項目への回答
- ・調査結果
- ・質疑応答
- ・今後の研究課題
- ・収集文献

報告 1・報告 2 に関する討論：

勝田：松岡報告の発表資料スライド 10 の先端分子生物学研究センターはどういう施設なのか。放射性関連の研究を行っているのか。

松岡：日本原燃の施設に行く途中に立地しており、結構目立つ大きな施設であった。私も気になっていたのだが、具体的にどのような研究を行っているかまだ調べていない。環境科学技術研究所自体が核燃サイクル政策に関連して設立されたものであり、先端分子生物学研究センターもおそらく放射線影響に関連するものと思われる。

竹内：もともと核燃サイクル施設の立地に反対派であった人で、その後、容認するように考えが変わった人に対してのインタビューは実施したのか。

松岡：反対派以外の中立的な人や賛成派にもアプローチを試みたのだが、なかなか自由にインタビューに応じてもらえなかった。

中川：この後、六ヶ所村の人々の核燃料サイクル事業に対する考えの変化について報告いたします。

松岡：吉田報告にもあったが、村の企画の説明では、村の職員約 200 名の全員が北海道の幌延か岐阜の瑞浪の地層処分研究施設の見学に 2 泊 3 日で行っており、議員や村人に対する関連施設の見学会なども行われているとのことであった。北にある東通村では、福島事故で原発が当初計画より少なくしか立地しないので財政難に直面しており、高レベルの地層処分の受け入れも考えたいということを東通村長が発言したとの報道があったとのことである。これに対して、六ヶ所村では、すでに高レベル放射性廃棄物貯蔵管理センターで危険な陸上保管をやっており、それなら陸上保管よりリスクが低いといわれる地層処分を受け入れてもいいのではとの意見が村議の中にはあるとのことであった。東通に持っていけるぐらいなら、実績のある六ヶ所村の方がよいという「論理」が作用しているようである。

報告 3: 李 洸「日本原燃の核燃料サイクル事業の取り組みと課題」

- ・調査概要
- ・調査先概要
- ・調査結果

- ・まとめ

報告 4: 中川 唯「核燃料サイクル事業をめぐる六ヶ所村内の動き」

- ・調査概要
- ・菊川慶子（「花とハーブの里」代表）プロフィール
- ・調査結果
- ・六ヶ所村における核燃料サイクル事業をめぐる経緯
- ・なぜ、六ヶ所村において核燃料サイクル事業に対する反対運動は収束していったのか
- ・巻町と六ヶ所村の比較
- ・今後の課題など

報告 3・報告 4 に関する討論:

松岡：何か質問・意見はありますか。

勝田：李報告の発表資料スライド 16 の日本原燃の安全対策についてですが、水素による爆発の対処でエンジン付き空気コンプレッサーを利用するのは何故か。

松岡：コンプレッサーで空気を送り込んで水素を押し出すということではないか。

勝田：中川報告について。原発施設立地の反対運動の成功したフレーミングを検討することで、六ヶ所村の事例に結び付けていくわけではないということでしょうか。

中川：六ヶ所村の事例はかなり特殊な事例と考えられ、他の地域における原発施設立地の受容性と結びつけて考えることは難しいと思う。

松本：1970 年代の用地買収のころに核燃料サイクル施設の立地についての議論はされていたのか。

中川：むつ小川原総合開発計画の頓挫から、1980 年代に核燃料サイクル施設の立地についてはとんとん拍子に進んだようだ。村民にとってはかなり不透明なプロセスであったと思う。

松岡：1969 年の新全総に基づくむつ小川原総合開発計画により、青森県や財界の設立した開発公社による重化学コンビナート建設のための用地買収がどんどん進んだが、結局、1970 年代の 2 度の石油危機で工業開発計画は挫折した。結果として広大な工業用地が未利用のまま残され、その穴埋めのために石油備蓄基地や核燃料サイクル施設の立地が進められた。1970 年代の初めから決まっていたわけではない。

竹内：JNFL（日本原燃）は関連施設の操業を計画通り進めたいと考えているのか。国としては、福島原発事故の影響等でもういいという感じではないか。そんな中で、JNFL は焦ってはいなかったか。

李：そういう印象はなかった。順調に行けば、再処理工場はすぐ稼働できると言っており、自信をもっているようだった。

竹内：李さんの研究課題は何になるのか。

李：今回、政策的な面で様々な課題があることが確認された。これからもう少し詳細な調査分析を行い、具体的な研究課題を整理していきたい。

竹内：六ヶ所村の事例において、欠如モデルや文脈モデルは当てはめられるのか。

中川：反対派がほとんどいなく、村民は何が危険か認識していないように思える。関連施設の建設にあたってどのような情報を得ていたのか調査する必要がある。

竹内：もともと反対派の人々はどこに行ったのか。

松岡：反対派の菊川さん自身も典型的な欠如モデルであり、村の人々が正しい科学的情報を知れば核燃サイクル施設の危険性を知り、反対するはずだということを強調されていた。日本は推進派も反対派も欠如モデルに依拠している状況にある。村民の多くが何かしらの形で核燃料サイクル施設に関わっており、こうした核燃サイクルに依存したある種の文脈がすでに存在する。青森県で最も豊かな村になった現在、バックエンド問題に対しても大きな抵抗感がないのではないか。多くの反対派の農民たちは、1970年代の総合開発計画による農地買収などにより、すでに六ヶ所村を離れてしまっている。福島原発の立地した福島県双葉郡も、かつては福島の「チベット」と言われた貧しい地域で、原発立地により過疎化が止まり、周辺地域よりも所得の高い地域となっていた。青森の「満州」と言われ、満州引き揚げ者が多く入植した六ヶ所村もかつてはヤマセがふくと農作物が取れず、大変貧しい地域であったが、今では原発関連で多くの人が働き、人口も1万人を維持している。1970年代・80年代と、国策に翻弄され続けた村は、今では日本社会の中でもはかなり特殊な性格を持った村に変貌しているように思える。

今後の予定について

・ 7/7（木）12:00～14:00 RA 打ち合わせ

・ 7/15（金）17:30～20:40 第3回研究会（713 会議室）

奥村裕一（東京大学公共政策大学院客員教授、元通産省資源エネルギー庁原子力産業課長）
「核燃サイクル政策とバックエンド問題をめぐって」（仮）

竹内真司（日本大学文理学部地球科学科准教授）

「地層処分の安全性評価をめぐって」（仮）

コメント：井上 弦（神奈川県農業技術センター技師）

・ 8/23（火）～8/25（木） 第2次国内調査（青森県大間原発・使用済燃料中間貯蔵施設）

・ 9/12（月）～9/13（火） 第3次国内調査（北海道幌延深地層研究センター）

以上